

中央教育審議会総会（平成 26 年 6 月 30 日）における主な意見等

- 「達成度テスト」の在り方のみならず、各大学の入学者選抜をどのように改革するかの検討が必要。多様な人材が大学において主体的に学び考える力を身につけてこれらからの次代を担うために、どのような入試を行うべきかの議論が求められる。
- 高大接続はこれからの大学教育、高校までの初等中等教育、また、日本社会の人材育成という観点からも大変重要な課題。当初は、7 月末を目途として答申を取りまとめるとの目標で進めてきたが、もう少し時間を掛けて、更に議論を詰めていくことが必要と考えている。
- 各大学がアドミッション・ポリシーに沿って自らの責任で多様な人材を入学させることが必要。
- 面接や小論文等により多面的に評価して学生を選ぶことが入学者選抜の改革の基本であり、個別の学力検査を各大学が行わない方向で審議していただきたい。特に国立大学は個別の学力検査は行わない方向で議論していただきたい。
- 各大学が個別の学力検査を行うかどうかは、「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の中身を踏まえながら、各大学がアドミッション・ポリシーに基づき判断すべきものではないか。
- 大学入学者選抜は、小中学校への教育にも影響があるので、高校のみならず小中学校への影響も考慮して検討いただきたい。
- 次期学習指導要領改定の議論と達成度テスト等の高大接続の議論がどう重なっていくのかということも考慮することが必要。
- 「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の導入が平成 33 年度で現在の小 6 以下から適用となるが、現在の中 1 以上の生徒が受ける現行のセンター試験との切り分けができるのか。翌年から新しい制度に移行するという時点で何らかの影響が出るのではないかと。センター試験と新たな試験で断層ができないよう留意願いたい。
- 例えば、任意の高校生にプレテストを受験させ、それを数年かけて行った上で、移行していくことが必要。

- 「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の導入時期については、平成 33 年度入学者選抜よりも前に実施することも考えるべきである。

- 台湾の学生の多くが米国に留学しているが、日本語の授業を行っている台湾でなぜ日本に留学しないのか聞いたところ、年 7 回の SAT 試験があり、一定の点数を取れば米国での留学が可能となる。今回の新しいテストで複数回実施を行う場合、せめて 5 回ぐらいに回数を増やせないか。